

【福島大学むらの大学アーカイブ20】 【川内Chapter7】

夫婦の思い

震災経験とこれからの川内農業

松崎安延さん 松崎君子さん



【インタビュー日時・場所】

第1回インタビュー 10月12日・松崎さん畑

第2回インタビュー 10月30日・松崎さんご自宅

【聞き手】

行政政策学類 梅津妃菜 佐藤大亮

食農学類 渡部ひなこ

担当教員 千葉偉才也

プロフィール

松崎安延さん

昭和26年、7月8日生まれ(インタビュー時73歳)。川内第2小学校、川内中学校を卒業。実家の家業であった農業を継ぐ。東日本大震災までの35年ほど富岡町でタクシーやトラックの職につきながら、兼業農家として働く。震災後は川内村で専業農家として生活している。

松崎君子さん

昭和26年、12月24日生まれ(インタビュー時72歳)。川内第1小学校、川内中学校、富岡高校川内校を卒業後、東京の印刷業に就職し約2年間ほど働く。その後安延さんと結婚し、川内村に帰る。東日本大震災を経て、2015年に設立した野菜勉強会の代表を現在務めている。

1. 震災前の川内村

—幼少期の川内村での生活について教えてください。

松崎安延：そうですね。われわれ子どものときは、結構、子どもが多かったから、1区にも（小学校が）あったし、ここ3区ももちろんあって、あと、そのほか分校なんかも結構あったんですよ。3年になると1、2、3、小学校三つあって。そこに分校から入ってくる。

松崎安延：同級生、200人。

松崎君子：192人。

松崎安延：5クラスあったんです。

—現在とは規模が違いますね。

松崎安延：だから今の子どもを見ると。

松崎君子：全校生徒で71人

松崎安延：全然。全校生徒？俺らの1学年もいない。ちょうど昭和26年は終戦で帰ってきてベビーブームが。きょうだいみんな4人、5人ぐらいは普通で、多い人は8人、9人。

—当時の進学率はどの程度だったんでしょうか。

松崎安延：いやね、俺らつきあってる同級生はみんな就職しましたからね、中卒で。だから、どう……戦後のベビーブームですごい子どもが多かったんですよ。川内中学校で200人いた、196人か、いたんだけど、「えー！」って今ではいわれるね。想像できないって。そのぐらいいて、だからどのくらいだろう。半分ぐらいか？

松崎君子：どうだったんだろうな。ちょっとその辺は記憶ないな。

松崎安延：うん。あんまり……行ってないですね。で、川内って結構場所的に、双高だったりとか、大熊とか原町とかになるんだけど、通学ってなかなか難しくて下宿すると、皆さんが行ってる大学に行くぐらいの下宿代かかっちゃうって言って、なかなか親の負担も大変だったんですよね。だから、ある程度、家庭的に恵まれてないと、いわきだったりあっちに下宿してっていうのは、全部の家庭がやれるわけじゃなかったな。

松崎君子：そうだな。

松崎安延：俺の周りで、俺の友達は何も行かなかった。みんな集団就職で行って、すぐ帰ってきたけど、あつという間に帰ってきたけど、だいたい……だなあ。だから、川高できたからな。川内高校には自分のうちから。

松崎君子：四十何人いたもんね。ほかから来た人もいたんだ。富岡とかあっちのほうから来た人もいたんだけど、40人近くはいたのかもしれない。

—川内からも、かなりの人数、戦争に行かれましたか。

松崎安延：行ってたんじゃないか。うちのおやじも行ってたから。行ってたと思います。

—終戦後、戦地に行かれていた方々は段階的に戻ってきたのでしょうか。

松崎安延：いや、うちのおやじの話だと終戦になったから、もう戦争は終わったんだから、みんな各自うちがある人は帰りなさいと言ってピン札で印刷したばかりのお金をもらって、あと缶詰の飯、それをもらって。長崎とか、あの辺へ行ってたんだな。だから、もう終戦になりました。あとは自由にしてくださいという感じで、自分で。

—安延さんのお父様は戦地への派兵ではなかった。

松崎安延：志願兵で行って、海軍兵学校。そこで何年かいて、あとは佐世保とか長崎とか、こっち内地ですね。外地には行かなかったみたいで。外地へ行ったら分からないですね。でも内地にいても特攻隊や回天とかってね。

—海軍のほうの特攻隊ですね。

松崎安延：うん。あれの特別攻撃隊を命ずって1回配属になった。そこで出撃命令下れば、もう帰ってこない。片道の燃料しかなくて、スクリュウ目がけて行きなさいと言って。操縦なんかも木でつくった模型で操縦しているから実際のあれは乗ってない。出撃命令下れば真っすぐ行ってスクリュウ目がけて死んでいくという、らしいんだけど出撃命令下らないで。。配属変わって、また違うところに行ったみたいです。

—お父さまは長男だったのでしょうか。

松崎安延：長男は戦死しているんです。長男はグアム、ルソン島とかというところで野戦病院に入っていた。本当は野戦病院って攻撃してはならないんだってね。戦争の条約で。ところが日本はそういうところに弾薬とか何かを攻撃されないから置らしいんです。アメリカは知っているわけ。攻撃されて、もう何も残らないというか、遺品がなかった。

—安延さんは終戦して6年ぐらい経ってお生まれになったんですね。

松崎安延：そうですね。

—その時期の川内村は、貧しさなども含めて戦争の名残はあったのでしょうか。

松崎安延：26年って、それほど腹減らしたとか、特別。みんなが同じだったからね。贅沢はしなかったかもしれないけど、食うもの無かったなんていう感じは記憶に無いんです。

—戦後、安延さんのご実家はどのような仕事をされていたのでしょうか。

松崎安延：農家で冬は林業、炭焼きとか、そんなのをやったり。あと昔は、ここ葉タバコだったんですね。タバコがほとんどのうちでやってた。タバコをやりながら現金収入として冬場、暇なとき出稼ぎに行かないで山仕事。そんな感じだったみたいです。

—出稼ぎに行くご家庭とかも結構、川内は多かったですか？

松崎安延：いやあ、出稼ぎ、いたでしょう。

—いわゆる金の卵とかにあたるのでしょうか。

松崎安延：俺らの集団就職。俺らの年代は金の卵で、もう中学卒業すると、すごい、もう、みんなにワーツと送られて、そういう時代でした。

—安延さんは川内中学校を卒業された後はどうされたのでしょうか。

松崎安延：ここにずっといたんです。実家の家業というか、ずっと農業を継いでました。

—君子さんは川内中学校を卒業された後はどうされたのでしょうか。

松崎君子：ここに地元川内分校あった。富岡高校を卒業して就職して、東京に、2年弱くらい行ってきて。

松崎安延：絶対帰ってこないと思って行ったらしいけど。

松崎君子：何か呼び寄せる人がいたんだよね。

松崎安延：こんな川内に絶対帰ってこないと思って行ったらいいんだけど、たったの2年で帰ってきた。

—君子さんは東京で2年間どのようなお仕事をされていたんでしょうか。

松崎君子：写真植字なんて聞いたことないですよ。タイプなんだけども、そういう印刷会社のタイプ、昔はほら。今のじゃないから、こんな何か持つところついて、文字盤があって、文章をつくって。何か東京が親会社みたいな感じだったんだけども。そこで辞書とか何か、そんなのを作ったりして。

—2年間、東京で過ごされたんですね。

松崎君子：東京から埼玉を行ったり来たりだね。事業所と寮と。

—その時期の東京は、ごった返していた時期なんですか。

松崎君子：そんなに、ごった返していたという記憶はなくて。ただ、通勤のときの電車の中が、もう暑いとか、ああいうのが、もう大変だったね。もう東京はもういいかなと思ったね。

—先ほどの話で、「呼び寄せる人」がいたというのは、お二人の馴れ初めということでしょうか。

松崎安延：いや。もう同級生だから知ってはいたんだけど、顔は知ってたんだけど、東京へ行ったら変わりましたね。全然、同級生。あれっ？あれっ？すごい変わってきました。

—東京の女性になっちゃったんですね！

松崎安延：なっちゃいましたね。

松崎君子：とんでもない。気持ちはなっていないけど。

松崎安延：あの当時はオオカミカットとかにして、ミニスカートがはやって。ミニスカートはいて。

松崎君子：だって、その頃はしょうがないわな。

—年齢でいったら二十歳前後ってことですよ。

松崎君子：そうだね。18で卒業して。

—2年間ですもんね。

松崎君子：2年間だから二十歳くらいで来て21くらいで結婚したんだもん。寮まで（安延さんが）トラックで来て、荷物を持って（引き揚げた）。

—それはもともと、その東京行く前から、そういう話があったんですか？

松崎君子：ない。

松崎安延：ないない。

—東京行っている間に、そんな話になったのでしょうか。

松崎君子：うちの実家の父親がちょっと具合悪くて病気見舞いみたいな感じで帰ってきたのね。夜ノ森駅なんて今もあるよね。

松崎安延：ある。

松崎君子：そこで電車待ちだか降りてきたら、何か偶然にいたの。あれ。何か友だちと3人くらいで偶然に何か駅前に車でいたんだよね。それで乗っけられてきた。

—そこからのご縁。

松崎君子：うん。かな。

松崎安延：そうかな。

松崎君子：分からないわけでもなかったから。

松崎安延：顔は知ってるからね。

—戻ってくるという約束になって寮までトラックで迎えにきた。

松崎君子：うん。

松崎安延：荷物な。荷物取りに。

松崎君子：荷物取りに。

—もう戻ったら即、結婚なんですか。

松崎君子：いや、戻ってきてからは、やっぱり免許取りに通ったりなんかして。仙台に姉がいたものだから夜ノ森の教習所、富岡教習所が混んでたので、仙台の姉のところに泊まって免許を取って。それで、その前にも近くに何かちょっとした工場とか経営している人がいたものだから、そこに勤めたりして、21であれだね。

松崎安延：やっぱり昔は2人で車なんか乗っていると親がもう、親とかおじさんとかがいて「あいつら評判になってあれだから、ちゃんとしなきゃ駄目だっぺ」みたいになって。もう、われわれがあいさつに行き、お願いしますとか何か言う前に両方の親が、もう仲人を立てて、もう、そんなね。

松崎君子：周りの人が、おばさんたちが騒いでね。

松崎安延：もう、みんな周りが、おじさんおばさんとかが騒いで、もう、あれっ、あれっ、あれっという間に。

—ある意味、楽っちゃ楽な部分もありますよね。

松崎安延：いや、楽でしたよ。全然。だから何もしないうちに、もう全部もう仲人も親の知っている人が来るし、もう向こうのおじさんとかいろいろやってくれたから、何もやってない。

—決まりさえすれば、あとはもう段取りも含めて周りがある程度、支えてくれて事が進むようになっていくということでしょうか。

松崎安延：その辺は村だから、もう2人で車で会ってたなんていったら??「あれ、どこの息子とどこの娘だ」なんて言って。「親、知ってるのか」なんて。

—ご結婚されてからは、ずっとこちらのお家で。

松崎安延、君子：そうです。

—ご結婚された時期のお仕事は何をされていたんですか。

松崎安延：兼業農家。ずっと、いろんな会社の運転手が多かったんです。トラックやったり。あとタクシー会社も35年やっていました。

—農家をやりながらタクシーやったりとか、農家をやりながら東電やったりとかというのは、一般的だったのでしょうか。

松崎安延：そんな感じでした。東電には行かなかったけど、ずっとタクシーやっていました。

—その働き方は震災まで続くのでしょうか。

松崎安延：震災まで。震災でちょうど60歳だったんです。

—どっちにしても60歳定年だったんですか。

松崎安延：60歳定年で、嘱託、再雇用で。結構、運転手不足していたから。もう、そのまま、ずっといる気はしてたんですけど。

—富岡にはタクシー会社が複数あったのでしょうか。

松崎安延：タクシー会社は2社あったんですけど、富岡はすごい売上ありました。福島県でトップです。

—どういふ人たちがよく使っていたのでしょうか。

松崎安延：東電。東電の、もういろんな東芝だったり日立だったり、一流会社、全部入っているでしょう。あの人らが自分の車で事故とか起こされたら困るから。残業したら必ずタクシーで帰ってくださいと。そういうのだけでも大変だった。

—タクシー需要が結構あるところだったのですね。

松崎安延：いやあ、ありましたね。本当に、もう、ずっと走りっぱなしで。夕方満タンにしておかないと次の日の朝まで間に合わないという感じで走っていました。建設当時もすごかったんだけど、運転してからも定期点検とか、たまにやっていたから、それなりにいました。

—その時期というのはタクシー運転業務はシフト制だったのでしょうか。

松崎安延：シフトです。朝、一番早いのは7時ぐらいに行行って夕方戻ると、あとは夕方5時に行行って次の日の朝、一昼夜、20時間やるの？？あと10時ごろ行って2時ごろ上がるというのも、いろいろパターンがあつて。休みがあるから百姓には都合がいいです。休みが多いから。

—その間、君子さんは農業をやりながら、お家のことをやっていたという時期だったのでしょうか。

松崎君子：いや、勤めたりもしていたから。会社勤め。

—川内で勤務されていたんですか。

松崎君子：うん。川内に昔は結構、縫製会社とかあったものだから、そこで何年かぐらいずつ働いて。その後、農業をできる範囲でやったりして。

—もともとご実家は農家とかだったのでしょうか。

松崎君子：農家なんですけど、それほどの大農家ではないので。やったことなかったんだよね。

—もう今や農業のエキスパートじゃないですか。

松崎君子：だから「よく、ここに来てやってるもんだ」なんて、みんなびっくりされたりして。

—川内村の村民の働き方は原発立地前と後では変わったのでしょうか。

松崎安延：川内村は出稼ぎなんか結構あったかもしれないんだけど、東京電力できてからは、もう

みんな東電、結構、給料よかったからね。都会並みに給料がよくて。だから出稼ぎなんて行かなくても東電で勤めて出張とか何かでどこか行くというのはあるけど。

—じゃあ周辺だったりしても東電勤務とか下請けとかで働くような人たちが増えてきたんですね。

松崎安延：そうそう。いやあ、ほとんどそうだったんじゃないですか。川内は。

—それは逆にいうと安延さんとか君子さんが小学校時代とか中学校時代に比べれば全然、村の中の働き方が変わってきたということですよ？

松崎安延：いや、全然変わったでしょう。東電で結構みんな働かせてもらって、そこそこ、いい思いをした人、だいぶいるよ。

—それはいわゆる分かりやすいところでいうと、大熊、双葉とかだけではなくて、こっちの中山間地域も結構やっぱり恩恵があったということでしょうか。

松崎安延：いやあ、川内なんか東電なかったら大変だったと思います。東電のおかげで、みんな出稼ぎにも行くことないし。あそこ都会並みの給料出るんだよね。もう村からしたら村の地元の業者で働いていたんじゃ全然、想像つかないような。

2. 震災と原発事故

—2011年3月11日はどこで何をされていたのでしょうか。

松崎安延：3月11は、地震あった日ですよ。地震あった日はうちにいたんだけど、すごいことになっているというのを分からなかった。俺は。次の日は7時の仕事だったからタクシーで、そのまま行っちゃった。富岡に。そうしたら富岡の町でいつも新聞、地方紙とスポーツ紙を買ってタクシーで見るのに買っていくんだけど、「いや、まだ新聞来てねえんだ」なんて新聞屋が言って。じゃあ、あと2、3回仕事してから回るなんて言って、会社へ行ったら、「富岡駅ねえど」って。

—じゃあ本当に翌日になるまで、あんまり感じずに。

松崎安延：全然。あれ報道、何もなかったよ。

—テレビは映っていたのでしょうか。

松崎安延：テレビは映っていたけど原発が大変なことになっているとか、津波で富岡の町の話は全然分からなかったよ。行ったら、もう誰も来てないよね。富岡の人、もちろん。7時ごろに富岡の住民は川内に避難してくださいって話になったんです。えー。今、川内から来たのに。富岡の人間と一緒に避難してきた。避難してきたというか戻ってきた。

—そこからは、じゃあ富岡で勤務が翌日は富岡町民が避難してきたから、もう富岡での勤務はできない。

松崎安延：ないない。もう、すぐに封鎖というか、されちゃったから。富岡は入れなくなっちゃった。

—じゃあご自宅で待機みたいな状態だったのでしょうか。

松崎安延：まあ待機っちゃ待機だけだね。どんなふうになるか全然想像つかないしね。本当に、こんな近くにいる原発の放射能とかの知識がほとんどないから、大変なことになって、この辺、全村避難とか、そんな想像もつかない。「まあ避難しても2日、3日でまた戻ってこれんだっぺ」みたいな感じでいたから。全然、こんな放射能が大変なものだというのは全く分からなかった。

松崎君子：12日は富岡の人たちが避難してきて、それで川内のあちこちの公民館とか何かに回ってきたのね。それでじゃあタクシーの仲間の人たちも家族で避難してきたというから、じゃあ近くの公民館にいるというから。

松崎君子：じゃあ何か差し入れでもしなきゃならないかな、なんて言って買い物行ったんですよ。そうしたら、すごいお客さんで。「よかった。ちょうど、レジの周りで袋詰めとか手伝って」なんて言われて。こっちは中のほうから奥のほうから物、品出し手伝わされて。それで夕方くらいまでいたのね。

そしてテレビのニュースなんか見ると、やっぱりちょっと危ないから、なんていうような情報流れてきたものだから。ここの隣のおじさんのうちなんだけど、ここと、その向こう側も親戚なので、じゃあ、ということで、うちのばあちゃん、ちょっと身障者で歩けなかったものだから、車いすで。それで今度じゃあ、ということで、もう、どんどん、すごいんだから。ここで夕方、見ると、向こうのほうに避難していく人が。

—見えるんですね。ここから。

松崎安延：見えたんです。すごいです。

松崎君子：見える。それで、「じゃあ、どうする？ どこか行くしかねえか」って。ばあちゃんの車いすついたり、ばあちゃん乗ったり、何かして、とりあえずは、川内なんか、ほかより危険じゃないなんていうの分からないから、近いから一番おっかないと思うでしょう。それで今度、三春のセブンイレブンに行ったの。じゃあ、ここで、とりあえず一晩過ごすしかないかって。駐車場で。それで車の中で1泊したんだよね。

松崎安延：1泊したな。

松崎君子：そして次の日は猪苗代に1泊して。

松崎安延：うん。そこで避難している人とか地震の被害者、受け入れてくれていますよ、なんて言われて。猪苗代市にお世話になった。12日は三春に泊まって、13日は猪苗代に泊まって。14日かな、うちのばあちゃんのいとこが郡山にいるんだけど、そのいとこの旦那さんが「じゃあ俺のところに、みんなで来たら」って、親戚とか何人ぐらいだろう、10人以上はいたな。そこにばあちゃんも、みんな避難させてもらって。そこで8日ぐらいはいたかな。ばあちゃんも「じゃあ、もう、うちに帰っぺ」なんて言って。われわれも、ちょっと不安だったんだけど、でも、ばあちゃんがこう言うんだったら帰るしかないよなって、それで。

松崎安延：帰ってきちゃった。

松崎君子：8日ぐらい、郡山にいたのかな。そんな感じで帰ってきて。

—じゃあ川内に残っていた人たちとすれ違いのように

16日にみんな避難してたんだよ。みんな受け入れきれなかったんでしょう。富岡の人とか何千人も来たので。やることもないから、うちに来たって、もう、いつでも出掛けられるように荷物はまとめておかなきゃならないし。それで、もう何もすることないから、もう畑やってたわよ。

松崎安延：畑、駄目になった。

松崎君子：放射能でどうかこうとかって言ってただけど。でも畑に入ったらヤッケとか長靴とかを消防署で何チェックだっけ？あれ。

松崎君子：スクリーニングチェック。うん。それやってたので、それ終わったあとは持って行って測ってもらったら別に何の異常もないから、これは別に。暇しておくことないな、なんて思って。畑をやってた。でも一番感じたのは、ほとんど帰ってきてない。どこのうちも電気ついてないんです。夜。うちと。

松崎君子：何軒かだね。

松崎安延：本当、何軒も。これ寂しいね。今まで夕方、夜になると電気ついたんだけど、どこも真っ暗だから。

—じゃあ、この辺だと、ここだけ電気ついてた。

松崎安延：うちと、あと、ちょっと向こうの部落の人が。その人らでいつも集まって。寂しいから。いやあ、これだけ普通でも寂しいんだけど、どこも電気つかないで。携帯はつながらないし。

—その間、川内はビッグパレットに役場を置いて、帰村宣言に向かうまで避難生活をしているわけ

ですよ。たぶん、ここはここで、だから周辺に人がいない状況で先に帰還をして、そのときで、やっぱりその先が見えないじゃないですか。自分たちは戻っているけど役場機能が郡山へ行っているし、どう感じてました？どのぐらいで戻ってくるんだろうとか、そういう不安とかも、ありました？

松崎安延：いやあ、もう全然想像つかないんだよな。

松崎君子：そうだよな。役場が来るなんていうのはな。でも、村長の決断で結構早く帰村ね。

松崎安延：帰村したけど、それまでは田んぼだって米づくりはできないし。米つくったら犯罪ですよって言われる。つくろうと思ったんですよ。

2. 帰村後の生活と農業

—「米つくったら犯罪ですよ」と言われた。

松崎安延：大変なことになりますよ、と。そのあと実証田でつくってくださいと言われて少しは米つくったんだ。

—国も方針があんまり明確になっていない中で。

松崎安延：うん。もう、とりあえず農地には草刈りも何もしないでください。農地にも入らないでください。トラクターも入れないでくださいと言われて。草はボーボー。

—そうですよね。農地って一回、荒れちゃうと大変ですもんね。

松崎安延：うん。だから、そのあとは、いろいろゼオライトがいいとか、深く掘ってやればいいのか、そういう仕事を頼まれてやっていました。草刈って。ゼロライトって、どういう効果あったんだか分からないけど、やったね。

—その辺の時期は畜産とか農業って、やっぱり、その手塩にかけて育てたものを手放すとか処分をしなきゃいけないというような経験ってあるじゃないですか。そこはやっぱり苦渋ですよ。やっぱり、つらいですね。

松崎安延：いやあ、もう全然、言葉では言い表せないと思う。

—安延さんのところは、そういうようなことをやった時期ってあるんですか。

松崎安延：実証田といって、委託されて1区から8区まで何カ所か、1反までいかないくらいちょっとつくって。できた米はちょっとだけ天日干して、それを放射能検査した。あとの米はみんなガチャガチャにつぶしちゃって。でも、そんなにとんでもない数値は出なかったんだよね。出なかったんだけど、すぐそばだからな。

—放射線の影響がそんなに出ていないというような地域だと思うんですけど、その後は農業を再建しながら徐々に元通りと言ったらおかしいですけど農業を中心とした生活に戻っていけるようになった。

松崎安延：そうそう。みんな避難して、もう農業を始める人、少なくなっちゃって。俺もその頃は5ヘクタールぐらいだったな。5ヘクタールぐらいだったんだけど、どんどこ、どんどこ増えていっちゃって。今9ヘクタールくらいになって。

松崎君子：みんな、農業やらなくなってくる人が多いから、やってくれなんて言われてね。

—じゃあ農地が増えるというか、ほかの家の農地も扱うようになった。

松崎安延：そうそう。うん。震災前はどこでも1町とか7反とか、必ず、どこのうちでもやっていたんだけど、震災後にやめる人が沢山いてね。だから、われわれみたいなところに集まっちゃったんだね。

—震災前に比べて扱う農地は増えている。

松崎安延：倍だね。

—倍。大変ですね。頼られちゃってるじゃないですか。

松崎安延：うん。もう黙って、はいはい、はいはい、やってたら、とんでもなく、あれになっちゃう。うちもお願いします、うちもお願いしますで。

—じゃあ、そういう意味では、もちろん震災前タクシーのほうもやられてたけど、農業一本でやっているにしては結構、今は忙しい日々を。

松崎安延：そうだね。年金と、あとは田んぼで。田んぼないときはもう何もやってない。自分の趣味の日曜大工みたいなのをちょこちょこやって。

—安延さんは、じゃあ基本的には今は田んぼで、このシャインマスカットとかは君子さんですか。

松崎君子：ううん。

松崎安延：一緒にやってるんだけど。2人で。これだけでは食えない。

松崎君子：こんなものは、もう遊びみたいな感じでやるしかない。これで生活できないから、ブドウでは。

—君子さんが野菜勉強会をやり始めたのは、いつごろなんですか。

松崎君子：今から7、8年前かな。震災で村帰ってきてからかな。普及所の先生とかが役場に常駐するようになって。そのとき、こういうのやらないか？みたいな先生がいたのね。それで最初は農協の2階とかで講習会みたいな感じでやっていたんだけど、じゃあ、そのうち、なんて言って、野菜勉強会みたいなものをつくって、最初は勉強会だったんだけど今は、なんだかんだしているうちに、いろいろとつくり始めて。それこそ福島大学さんだの玉川大学さんだのから当てにされるようになって。

そういうの好きな人たちが結構集まって会員としては20人くらいいて、自分ちでも結構お野菜づくりとかやっているんだけども。やっぱり自分のところ置いといても勉強会でいついつこういうことやるよと言うと、みんな出てきてくれるんだわ。

松崎安延：大勢。自分のところ差し置いてやってるな。

松崎君子：うん。何か楽しいところもあると思うんだ。やっぱり休憩時間なんかは、みんな自分で何かつくったり、持ち寄りで何かお菓子持ってきたとか、そういうおしゃべりタイムになっちゃったりして。みんな、いい人ばかりの集まりで。そんなことで今に至って。総会の資料の日付を見ると始まったのは平成27年ころだったみたいだから、もう9年目くらいになるのかな。

—もともとは希少野菜とか西洋野菜というのは最初の頃から、そういうことを勉強し始めたんですか。

松崎君子：いや、最初はそんなのじゃなかったね。でも先生がいるときに、こんな野菜もとか話を出してくるものだから、じゃあ、なんていうことで、つくり始めたんだけど。いわきで、そういうイタリア料理というのかな。そういうのをいわきでやっている人がいて。その人が間に入って、いくらか持っていったりしていろいろやって。白ナスなんかもつくったけど、どんなふうに料理したらいいのか、お客さんに聞かれるんだけどわからないから「まあ普通に食べればいいんじゃない？」なんて言って。やっぱりこの栗原はるみさん。料理研究家の、あの人に、このナスをどういうふうに食べたらいいか教えてくださいなんて言って。それで、ここでおしゃべりしなが

ら、グラタン風なナスの料理を教わって。あの人も忙しそうだね。栗原さん。

—去年、玉川大学のときに白ナスたくさんいただいて、私も結構、研究しました。やっぱり、あれですね。グラタンもそうですし、チーズとかオープン料理系のほうが合いますね。

松崎君子：そうだね。ちょっと少し厚めに切って、鍋で蒸して、それでニンニクしょうゆとかショウガすって、かけて食べたりするとおいしい。

—おいしいですね。とろける感じですよ。

松崎君子：そうそう。皮は硬いから、ちょっと皮むかないと食べにくいけど。

—川内でいうと農業を軸とした生活というのは徐々に落ち着きを取り戻しているというような感じですかね。

松崎安延：うん。勤めに行っていないしね。ちょっとぐらいいは農地の面積が増えても何とかこなしているんですけど。けどほかの人もできないもんね。

松崎安延：米作りって1年に1回しかやらないじゃないですか。10年やったらたったの10回しかやってないですよ。肥料とかなんかも、肥料設計なんかも、どのぐらいの量をやったらいいかっていうのは、1年2年じゃやっぱりわかんないですよ。ね。「ちょっと足りなかったな」とか、「多かったな」とか、その経験で少しずつ減らしたり増やしたりしながらやっていくんだけど、そんなにね、10年やってっていったって10回しかやってないんだもんね。第一は天気だから。天気。これ、どうにもなんない。これがやっぱりみんなが自分の子どもにやらせたくない理由じゃないですかね。農機具の高いのもあるけど、天気に左右されちゃうんだよね。一生懸命、一生懸命、いろんなことやっても、本当に。出穂っていうか、稲の穂が出るときがいちばん大切なんだけど、その時にある程度の温度の気温がないと全然実が入らなかったり、入っても少なかったり

—「絶対」がないですよ。ね。「こうすれば安全」とかもできない。

松崎安延：できないですよ。だから、昔は農家の長男は、「おめえはバカだから百姓でもやれ」なんて言われたり、そういう時代があったんですよ。「おめえはバカだから、ほかに行って生活できねえがら百姓やれ。うちに残ってろ」って。けど今、バカは百姓できねえな」なんてみんな言ってる。

—できないですよ。農業ほどすごい緻密で繊細なものってないから。

松崎君子：機械にしたって、今はすごいもんね。コンピューターであれしてるし。

松崎安延：今はね、ほんと、こういう頭のいい人だったらすぐできるでしょうけど、ドローンだったりいろんなのにGPSつけてきたんですよね、もう。トラクターだったり田植え機だったりに記憶させておいて、すごい。だから、頭のいい人だったらいろんな機械を使いこなせばいいんだろうけど、俺らはそんなの、あんまり面倒くさいのはできねえから。

—遠隔操作で田んぼに水張ったりして。

松崎安延：ねえ。そういう時代。そういうことを言ってる時代なんだけど、でも、俺はね、田んぼって、田んぼに直接行って、稲の色とか、病気になってないかとか、イノシシに荒らされてないかとか、見ないとやっぱりわかんないような気がするんですよ。ただ水だけ平均に、常に水だけ入ってればいいという、それはもしかすると違ふかなって思うんですよ。やっぱり長年の勤とか。機械にしかできないことはもちろんあるんだけど、機械だけではっていうところはあるような気がするんだよな。

うちに米を買いに来た人で、「もう来年はいいです」っていう人はいないんだよね。一回来ると、絶対、毎年来るな。

松崎君子：家族とか知り合いとかの分も買ってくる人もいてな。せっかく買ってくれるっていう人いるから、保管しておいて、おいしく食べてもらって喜んでもらえたらいいかななんて。

—取材などが来ることは。

松崎君子：うちも結構、震災のときにいろんな人が避難してたりなんかして、やっぱり川内にいるの、うちだからTBSなんかでよく取材に来たんだよね。

松崎安延：来たね。

松崎君子：うん。それでもう何回も3回も来て稲刈りして撮るとか。何だっけ。あれは。つくって駄目なとき。

松崎安延：実証田。

松崎君子：実証田やっているときも来て、稲刈りにきたり、もう何かしたりして、カメラマンとか、音声とか、ディレクターとか来て、何回も3回も来て、最後に何か10分間くらいの特番みたいな感じで放送された。

松崎安延：ニュース23だな。

松崎君子：私も、もう自由自在にしゃべってたから、そんなに緊張したりもしなくて、しゃべってた。

—**どんなことをされたんですか。**

松崎安延：焼き肉とかやってた。

松崎君子：倉庫でバーベキューやったり、マツタケなんかもらったりして。

松崎安延：マツタケ食わなかった。みんな。

松崎君子：これ、何か80くらいセシウムとかあるんだけど大丈夫。全然大丈夫、大丈夫なんて言って。

松崎安延：全然大丈夫って食ってたよ。

松崎君子：うどんのたれにしたり、ご飯つくったりして食べてた。80くらいは何てことないもんね。

松崎安延：「だって前は100まで大丈夫だったんだから大丈夫だ」なんて言って。

松崎君子：「全然大丈夫だ」なんて言って。

—**川内、今でも結構、マツタケ採れるんですか。**

松崎君子：うん。採る人はいるんだろうけど。

松崎安延：今年は分からないけど、あの頃は山に行って採る人が少なかったんだな。

—**今ってキノコって、どうなってるんでしょう。**

松崎安延：露地は駄目。

松崎君子：シイタケの原木も駄目ですよ。

—**みなさん採って食べてますか。**

松崎安延：食ってるね。

松崎君子：コウタケなんていうやつね。うん。シシタケというの。

松崎安延：シシタケ。

松崎君子：あれが一番多いのかな。でも平気で食ってる人いるけど、あれはちょっと食えないな。

松崎安延：いや、1回くらい大丈夫だって、みんな食っちゃうぞ。毎日食うわけじゃないから大丈夫だ。

松崎君子：全部食べるわけじゃないからね。1人でね。

—**やっぱり川内村は、山村の恵み、山の恵みで生きている地域ですね。**

松崎安延：そう。

松崎君子：秋にはキノコだったりね。

—今後も農業を続けていかれるのでしょうか。

松崎君子：こうやって農業をやっているのが一番いい。勤めと違って時間に縛られないから。

松崎安延：いいな。時間に縛られないしね。楽、楽。

松崎君子：だって、何時から何時まで勤めてでしょう。これやってると、もう自分の好きなときに出ていって、もうきょうはちょっと疲れたから、ゆっくり始めるか、なんて、そんな感じでやるから、本当に気楽で。

—究極の自営業ですよね。やっぱり農業って。

松崎君子：そう。うん。本当にいいよね。きょう、ちょっと雨降ってるし、ちょっと買い物でも出掛けてくるか、なんて。すしでも食べにいくか。

松崎安延：外食はするな。出れば外食だな。

松崎君子：だって働くのも、働かなきゃならないけど、もう年も年だから、ある程度は、もう自分の楽しみみたいなのも。ちょっとグラウンドゴルフなんか結構、年配の人やってるんだよね。70代の人なんか。私もそうになったらグラウンドゴルフでもやってみたいな、なんて。今からやっていけば、ちょっと年齢ったら、うまくなるかな、なんて。だけど駄目だな。百姓やってたのでは、グラウンドゴルフどころじゃない。

—でも、それが楽しいですもんね。

松崎君子：うん。

松崎安延：百姓、本当いいよ。

松崎君子：いいね。

松崎安延：専業農家になったら、もっといい。兼業は大変なときもある。農業って、この時期にこれは絶対やらなきゃならないというのはあるじゃないですか。そのときでも兼業だと天気悪くてもやらなきゃならないし。でも専業になると天気悪かったらいいや。あしたやる。もう全然、楽。

松崎君子：兼業農家の時なんかは朝は時間もったいないから、おにぎりつくって行って朝ごはん、おにぎり食べながらやったりしてたし。

松崎安延：うん。やってたね。

松崎君子：だから、よく頑張ったよね。

—じゃあ震災前は結構バタバタしながら農業もやっていた感じ。

松崎安延：やっていましたね。

—そのときは逆にいうと「農業っていいな」みたいなことは言わなかった時期ですかね。

松崎安延：俺らは、もう親に、こんな小さいときから「長男だから、うちに残るしかないんだからな。絶対、残れよ」って。好きなこともさせてもらったけど、もう、いろいろ車も買ってもらったしね。中学生の頃、ドラムに凝ってドラムなんか買ってもらったしね。そんなもの買ってくれる親いないよね。

松崎君子：同級生でバンドやって。ちょっと記憶ないんだけど中学校の謝恩会で何かやったらしいんだよね。

松崎安延：車だって18歳で免許こないうちに車買ってくれるもんね。どうやって、うちのおやじ、そんなに金あったんだべって。

松崎安延：だから、その代わり、うちからは出れないからな、みたいなもので。

松崎安延：でも農家はいいよ。農家はいい。農業はいい。

—お米、品種は何をやってるんですか。

松崎安延：ここは、ひとめぼれとコシヒカリと、あとはフクヒビキって家畜の餌。あと、村からの。

松崎君子：酒米。

松崎安延：酒米。夢の香。

松崎君子：川内で歸宴（かえるのうたげ）つくっているでしょう。それを夢の香というやつを頼まれてつくって、4年目か。

松崎安延：4年かな。

—ほかにはなにか？

松崎君子：あと餅は、あんまり、つくる人、少ないんだよね。だから一袋欲しいとか何かで、だから2反歩ぐらい、まとめてつくって個人に売ってやるんだけど。面倒くさいんだけど、しょうがないわな。それもね。

松崎安延：餅米つくっているね。

—じゃあ結構いろいろと。

松崎安延：うん。いろいろつくっているんです。

松崎君子：やっぱりコシヒカリだな。米はな。

松崎安延：ぜひ。酒米も。つくってから一等米に入ったことないんです。いろんな普及所の先生だったり、いろんな人に聞くんだけど、最終的にもしかすると川内にこの米は合っていないんじゃないかなという話になっちゃって。また、ことしも二等米でした。

松崎君子：何でもつくってるよな。川内でな。

—うちの食農学類の先生に日本屈指の米の研究家の方がいらっしゃるので、何かお手伝いが出来たら。

松崎君子：夢の香のことをちょっと。聞いて調べてもらいませんか。

松崎安延：村では夢の香、福島県のオリジナルの品種じゃないですか。だから夢の香にこだわったのかな。かもしれないな。

松崎君子：川内に合わなかったら、もっと別な品種つくればいいのかね。

松崎安延：その辺は村から頼まれて、これつくれと言われたら、つくるしかない。

—こういう形で川内に関わりつつ、またいろんな段階で関わらせていただきたいと思います。

松崎君子：通りすぎたときは、いつでも声かけて。顔を覚えてられたら。

松崎安延：よろしくお願いします。はい。じゃあ、そのとき、川内のコシヒカリ食ってもらおうか。うまいよ。

【担当学生感想】

むらの大学を通じて普段の講義では得ることのできない経験ができたと思います。授業をただ受けるのではなく、自分で現地の方々と交流することで震災に対する思いや、被災地となったふるさとで生活をしていく思いを知ることが出来たと思います。 今回の安延さん、君子さんにインタビューをさせていただいて、昔の川内村から震災後の川内村まで様々な川内村を知ることが出来ました。特に印象的だったお話は震災後、実証田などのお話です。いつもと変わらない土地が、目に見えない放射線というものによって作物を作ってはいけなくなるという心配、恐怖があったと思います。実証田と言われ、実験のように作物を育て、目の前で処分されてしまう事態も農家にとって酷なことだと思いました。また、農業についてお話を聞き、今後は農業、農機具のための政策などについても興味がわいてきました。安延さん、君子さんにお話を聞けてよかったです。今後の授業などにも生かしていきたいと思います。（佐藤大亮）